

はじめに

放送大学副学長 柏倉康夫

「情報化社会・メディア研究」も第3巻を無事に刊行することができた。なによりも執筆者と編集にあたった各位の努力のたまものである。

今号には平成17年度の修士論文要旨6編、修士論文添付要旨3編、論文3編、研究ノート2編が寄せられ、充実した内容となった。テーマがヴァリエティーに富むことは目次をご覧いただければ一目瞭然である。修士課程を修了した人たちが、その後も自分の研究テーマに関心を抱き続け、研究を深め、その成果を論文の形で発表してくれていることは、担当教員としては嬉しい限りで、放送大学が修士課程を設けて、地に足をつけた研究者を養成しようとした目的が着実に実りつつある証でもある。

放送大学付属図書館には、稀覯本のほかに幕末から明治初期にかけて撮影された古写真の貴重なコレクションがあり、平成18年度には、富山、福井、石川の学習センターが主宰した展示会ひらかれ、多くの観覧者をあつめた。

「写真」という新しい技術が世の中に登場したのは1839年のことである。この年の1月7日、フランスの学者で政治家のフランソワ・アルゴは、ダゲールによって実現された科学的な処理による数枚の写真を科学アカデミーで公開し、「ダゲール氏は特別な板を発明したが、その板の上には視覚的映像がはっきりと写っている。その映像は細部に至るまで、これまでになく鮮明かつ正確である」と述べた。外界の姿を正確に写し取る試みは、18世紀から多くの学者や技術者によって行われたが、化学処理の方法と技術がともなわず、このときまで実現をみなかったのである。この革命的な技術の価値を認めた国は、これを独占することを決め、その対価としてダゲールに毎年6000フランの終身年金を支払うことにしたのである。

ダゲレオタイプと呼ばれた「銀板写真」は、銀板に沃素の蒸気を当てて感光性を与えたものを原版として、暗箱で撮影したあと水銀蒸気で現像するもので、露光時間は20分ほどかかり、左右逆像で1枚限りのものであった。その後1851年には、イギリス人のフレデリック・スコット・アーチャーが「湿版写真」を発明した。これはコロジオンをひいたガラ

ス板を、硝酸銀に浸して感光性を与え、原版が濡れているうちに撮影して現像する「湿版写真」で、露光時間は5秒から15秒と短くなり、写真技術は世界に普及することになった。

ところで写真機が日本に渡来したのは、この新技術が世の中に登場してわずか5年後のことである。天保14年(1843)、ダゲレオタイプカメラ一式がオランダ船によって長崎に届いた。長崎の御用商人・上野俊之丞は、これを寸法入りでスケッチしたが、なぜかこのときは荷揚げされずに送り返された。そして5年後の嘉永元年(1848)、上野俊之丞は再びもたらされたダゲレオタイプを輸入した。日本初のこのダゲレオタイプは、その後薩摩藩の手に渡り、薩摩藩士の市来四郎たちは、安政4年(1857)には藩主島津斉彬の姿を銀板写真で撮影することに成功した。これが日本人を映した最初の日本人の写真であった。

ただこれ以前にも外国人による写真は幾枚か確認されている。例えば、ペリー艦隊の従軍写真家 F. ブラウン・ジュニアは、日本寄港の間に、琉球、下田、横浜、函館に上陸し、風景、建物、人物などを撮影し、その作品は「ペリー提督日本遠征記」(1856)の挿画の原画として使われた。

幕末に渡来した写真という新しいメディアは、日本でも驚くほど短期間に根づいた。文久2年(1862)には、早くも写真を職業とする写真家が誕生した。この年、横浜の下岡蓮杖は海外から湿板技術を導入し写真館をつくり、同じ年に、上野俊之丞の息子の彦馬は、長崎に「上野撮影局」を開業した。場所は中ノ島にあった上野邸の中庭を利用した野外撮場であった。「一等写真師、上野彦馬」の看板を掲げた写真館には、坂本竜馬、高杉晋作、桂小五郎などが訪れて、その姿を後世に残したのである。

メディア研究とは、情報の内容とともにそれを伝える手段(情報の支持体)に関心を持ち、それを考察するものである。以下のページで展開される議論はその良い例である。